

Title	研究とはどのようなものであるのか
Author(s)	三輪, 正胤
Citation	語文. 2017, 108, p. 6-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71002
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

研究とはどのようなものであるのか

三 輪 正 胤

田中裕先生が「桐火桶模索」を発表されたのは昭和四十六年発行の「語文」である。定家に仮託された「桐火桶」の善本を手元に置きつつ、その文献の確かさを手広く極めようとしている。新古今歌風の一つを創り上げた定家はどのような思念の下にあったかを論ずるためには、定家仮託書と言われる一群の書の検証は避けて通れない作業であった。しかし、この作業は特別に困難を伴うことであった。一群の書の大筋は、鶉の上下、鸞の上下の書が、「愚秘抄」「三五記」の核となり、それを前提にして「桐火桶」が成立し、この過程に「毎月抄」「定家十体」などの書が絡んでいる。この大筋には、定家の本意としたことほどの程度に含まれているかという問題が潜んでいた。この判定は困難という言葉を超えて論者の資質を問われる厳しい問題でもあった。定家仮託書は当初は定家偽書と称せられていたように、真偽の判断なくしては問題解決の方向性は出てこない状況下にあった。研究史的に見れば、真偽の論は相半ばしているといつてよく、未だにこの方向か

らの展望は開けない状態である。

「三五記」の批判を行い、論の基盤となっていた「毎月抄」の存立を疑つての「毎月抄批判」が昭和三十四年に発表されてから「桐火桶」の周辺を模索するに至る十余年の歳月は、先生にとつて苦難を乗り越切るための歳月であったかと考えられる。この歳月の中でいくつかの新見が出されているが、中で、注目されるのは、仮託書群には経信系と基俊系との二つがあるとの指摘である。これは、俊成、定家、為家と続く和歌の家の伝統は誰からのものであるかを明らかにしたものである。二条家、冷泉家といった流派抗争ばかりでなく、家を継ぐに相応しい口伝のあり方を示唆するものであった。この視点は、現在、伝受の系譜を明らかにする動きを齎している。

こうした一見、迂遠とも思われる仮託書群への言及の意味することは、先生には十分自覚されたことであつた。

『後鳥羽院と定家研究』（一九九五年 和泉書院）のあとがきに

「私の目的は始終文学論研究にあったが、しかしもし当面の論本文の性質に何等か不審を覚えることがあれば、直ちに手を換えて確実な本文を求めるほかはなかった。資料の探査、蒐集、そして本文批判へと続く類ひの仕事が私の一部となつてゐるのも必要に迫られての、いはば強ひられた手順にすぎない」と記されている。

定家仮託書の検討は定家の文学論を明らかにするために、必然として要求されてのものであった。表現論を目指しつつも、その過程に潜んでいる不確かな文献は批判されなければならないのである。文献は確かなものとして存在して初めて論ずるに値する。

定家の著作と考えられていた「毎月抄」に批判の目を向けられることになるのは、恩師小島吉雄先生が「新古今集と私」に語る「わたくしは文献的考証を以てわたくしの研究の最終目的だとは考えていない。それは、わたくしにとつては、ある研究目的に役立たせるための基礎的調査にすぎないのである」との言葉を引用していること（「語文」平成二年）に十分表れている。

単なる文献批判に墮すことのない表現論の真髄は『中世文学論研究』（塙書房）と『後鳥羽院と定家研究』（和泉書院）の二著を手にするることによつて、よく知ることができ、前著は昭和四十四年に、後著は一九九五年に刊行されていて、さしずめ、先生の前半生と後半生とを象徴する如くに聳え立っている。終生の学問の課題を追い求められた軌跡の集成となつているのである。

両者に見られる、その文の繊細にして流麗なることは、多くの人々の認めるところであつた。東に早稲田大学の藤平春男氏あれ

ば、西に大阪大学の田中裕氏ありとされた。

二著の題名からも伺われるように、二つの書を通しては、中世文学論の体系化が企図されている。日本の和歌史にあつて、最も繊細にして優美な歌風を創り上げた新古今的なものの源泉を探り当て、その眼は連歌に及び、世阿弥の能楽論に受け継がれていく筋道を見通している。しかし、この筋道もすでに出来上がった跡をたどるのではなく、新古今的なものを追求していく必然として辿り着かれたものである。その史的展開を見据えたものが前著であるとすれば、後著は、その源泉を二人の人物、後鳥羽院と藤原定家とに語らせている。

もとより、この視点は、明治時代後半頃から日本に齎された審美主義に基づいた文芸論にある。さりながら、その論は、日本においてどのように語ることができ、日本の言葉としてどのように語り得るかへの挑戦となつている。藤原定家にあつては、その歌風は幽玄あるいは有心とされながらも、言語としての表現を拒否するものであった。言葉を少なくして、無限の世界を表現するには、詩形を短くする他はないとして、和歌、連歌、俳諧と展開する歴史の必然性を疑いもなく書き連ねていたことへの批判がある。徒らな言葉の巧みさに覆われることのない真の日本語による論証をするという決意のもとで行われた「美」の探究であつた。定家の著作は極めて少ない。その中で、一門の者たちが著わした仮託書に定家的な気配を嗅ぎ取ろうとした真摯な姿は、「美」の求道者を思わせる。

審美への憧れに一層の磨きをかけたのが先生の詠歌である。万葉に詠われた「白珠」を追い求める同人との切磋琢磨の足跡は、今は、『伊勢物語』が詠じた「白玉」へと姿を変えて、朝の光の中に燦然と輝いている。

優れた新古今の歌人が、果たせそうでも果たせなかった世界を、自らの言葉で表そうとする苦闘の様が論文となり、ほつとすると時が詠作の時を刻んでいたのであらうか。

「美」に取りつかれた魂に永遠を願わずにはいられない。望んでも望み切れない世界を仰ぎ見えての羨望を記して。

(みわ・まさたね 大阪府立大学名誉教授)